

挨拶

長 尾 真（京都大学総長）

ただいまご紹介に預かりました長尾でございます。たくさんの方々に毎回おいでいただいております、たいへん有り難うございます。

京都大学のこの高等教育教授システム開発センターも何年かたちまして、いろいろな公開授業、研究、あるいは実験的なことをやって参りまして、私の見ておりますところ、たいへんな成果をあげてきているのではないかと感じております。これもひとえにご参加の先生方、いろいろなディスカッションをしてくださっている方々のおかげだというふうに思っております。この成果は外部の方々からは、かなり評価していただいているのではないかとと思うのですが。

実は京都大学の中におきまして、こういう活動が本当にいろいろ行われているということを認識している先生方が、比較的少ないというか、かなり少ない、というのが実は非常に残念なところでして、これをどうするかということが、私にとりましてひとつの大きな課題であるというふうにも言えるわけでございます。何とかして、無関心の先生方にこういうことについてもおおいに関心を持ってもらわないといけないというふうに思っております。ある意味では、京都大学の先生方にとりましては、ジレンマというところがあるわけです。何と言いますか、今までの考え方でいきますと、研究をどうしても中心に考えがちであると。そして、アメリカ、ヨーロッパ、どここの先生方がこんな研究成果をあげたというので、自分も頑張らなければならないと。何かこれに、つい頭がいきまして、しかも大学院重点化ということになって。大学院の学生諸君の講義、これについてはいろいろなセミナーであるとか、いろいろな形で何とか自分もきちんとやっているという自負と、プライドをもってやっていただいていると思うんですけれども、undergraduateの講義ということになりますと、かなり多くの先生がとたんに自信をなくしてしまうというか、実のところを白状しますと、どういうふうに講義をやって、学生諸君にやる気をおこさせたらいいかということについては、ある意味では無知であるといえますか。そういうところがあって、そちらにエネルギーを注いできちんとしたことをやらなければいけないという気持ちはあるんですけれども、なかなかそういうところに没頭できるだけの時間を十分持つことができないという、たいへんなジレンマに陥っているというふうに見ることができるわけでございます。

これを何とかしなければいけないということがありまして、これは、前の総長の井村先生の主張によりまして、ポケットゼミというのがいいのではないかとということで、これを去年の4月から半年間やっていただきました。これは、皆様方もご承知かと思いますが、大学の中のボランティアの先生方が学部を問わず、だいたい100名、99名、98名でしたか、ぐらいの先生方が手をあげてくださって、ひとりあたり10名以下の新入学生をグループにしまして、自分の教授室等々でマンツーマンで講義をするというか、いろいろなやり方でやる。これはご自分のやり方で、しかもご自分の興味のあるテーマで、半年間10人以下の学生とつきあっていろいろなことをやるというようなことをやってくださいまして、その結果についてのレビュー、あるいは報告書も出ておりますけれども、これは非常に好評でございました。先生方も自分たちはやって良かったと思っておられますし、学生諸君も参加して良かった、是非もっとやって欲しいという声がありまして、今年の4月からはだいたい120人ぐらいのボランティアの先生方がやってくさるということで、だいたい3,000人ちかく新入生が来ます中で、1,000名から1,200名ぐらいの学生諸君がこのポケットゼミを取るようになるだろうと思います。これによって、学問の面白さということについて、身をもって学ぶといえますか、そういうことになっていくのではないかとこのわけでございます。そういう努力をひとつはすると。ただこれによりまして、先生方の負担は増える。そしてまた、教室が足りない。それでもって、教授室でやっていただいていることがございますが、こういうことをなんとかもう少しシステムチックな形にしなければいけないということで、現在総合人間学部の先生方をはじめ、主要な学部の先生方が、特に全学共通科目について、少人数教育で、できるだけお互い双方向的な形で授業をやれるような、そういうカリキュラムを作ることができないかという、検討ワーキンググループをやってくださっております。その中でいろいろとアイデアが出てきつつありまして、できること

から、来年の4月から、カリキュラムの中に取り入れていって、改善していきたいというふうに思っております。これがどういう形で本当に上手く実行できるかはまだ見えておりませんが、そういう努力を私どもの方ではやっているわけです。

その他には、総合情報メディアセンターが1,200台のコンピュータを置きまして、この1階にも200台くらい置いてあるわけですが、本当は24時間、土曜日曜も開いてやるといいんですけれども、残念ながらそういうことになりませんで、今日は閉まっておりますけれども、たいへん学生諸君はこれに興味を持っておりまして、コンピュータ教育及び語学教育をそういう物を使ってやっていただくと共に、自習を学生諸君ができるようにしてあげたいということで、時間に関係なく学生諸君がやってきて、1,200台のコンピュータを自由に使って、インターネットを見るとか、語学の学習をするとか、あるいはコンピュータの使い方を勉強するとか、いろいろなことをやるようになっておりまして、自己研修といいますか、そういう方向で、これも上手くいっているのではないかと思います、自覚的に参加していくトレーニングというのを、もっといろいろな形で実際化していくことができないかということを考えております。

もうひとつは、国際化する社会の中で、なんとかして国際的な感覚を学生に身に付けさせたいという気持ちを持っておりまして、これにつきましては、総合情報メディアセンターの先生方をお願いをしまして、現在カリフォルニアのU.C.L.A.の先生方とタイアップしまして遠隔講義をやらうじゃないかというので、着々と計画を進めております。これはまったくボランティアのことでありまして、正式のカリキュラムの中には、とても現時点では入れられませんで、今年の後期から、後期にたったの1科目だけですけれども、それを毎週向こうの先生がこちらにリアルタイムで講義をしてもらって、学生諸君が質問をできると。これはインターネットで、ハイスピードで、インターネットでもって講義をして、インターネットでこちらからもレスポンスすると。それに参加する学生諸君をこれから募集しようという段階になっております。こちらからは、留学生センターの先生方をはじめ、2、3の先生方が講義をするとおっしゃっていただいていますので、英語でこちらから講義をU.C.L.A.の学生諸君に送ると。そういうことをやるつもりでありまして、これを半期間やります。それで、どういう効果が出てくるかというのを、いろいろな観点からmeasurementしまして、それぞれうければ、徐々に科目を2科目、3科目というふうに増やしていきたいなと思っております。これはカリキュラムとはまったく関係がなくて、現時点ではトライアルという形でやるつもりであります。それが良ければ、段々学生諸君もいろいろな国際感覚を持ってくれるのではないかというふうに思うわけです。

そんなことでありますけれども、もうひとつ、これも新聞などいろいろなところで議論されておりますが、大きな問題は、今日も議論が出るのかもしれませんが、高等学校を卒業して大学に入ってくる学生諸君の持っている知識と、大学が1年生から教えようとしている学問内容との間におおきなギャップがあるということ。それをどういうふうに補っていくかという問題がクローズアップされてきております。これは先生の方が私なんかよりはるかによくご存知のことですけれども、それについて京都大学としてどうするかという大きな問題であります。すでに総合人間学部の先生方の中で2、3の科目は、そういう学生を意識して講義内容を組んでくださってる科目もありますけれども、それで十分なのかどうかということもありますし、なかなかこれは問題かな、というふうに思うわけがあります。私はもともと工学部に属しておりましたので、工学部的な、工学部の先生方のご意見をいろいろお聞きしますと、数学に関する能力がものすごく下がっていると、嘆いております。嘆いているんですけれども、じゃあどうするかというと、嘆いているだけでなかなか具体案が出てこない。センター入試の影響かどうか、これは専門家の方々に聞かないとわかりませんけれども、○×式といいますか、あるいは、それこそ stimulus and response みたいな形での質問に対する答えというようなことについては、学生諸君はベテランでありますけれども、深い推論をして、きちっと数学の難しい問題を解いていくとか、今まで見たこともなかったけれども、よく考えれば解けるべき問題をじっくり考えて解くという訓練をほとんどできていないようでありまして、しかしながら、大学ではこれが絶対的に必要なわけありますので、これをどういうふうにして育成するかということについて、本格的に真剣に考えないといけない問題であります、これを京都大学でどうするかというのは、まだよく議論されていないのではないかと考えておりまして、なんとかする必要があるわけです。

そういったことをはじめといたしまして、大学に入ってきた学生諸君については、特に京都大学の場合は、「ほったらかし教育」といいますか、それを学生諸君を大人として扱うという良い言葉で言っているのですけれども、そう

いうことがあって、ますます最近の学生諸君は惑うということがあるらしくて、それについて、どこまで丁寧な手をさしのべるべきなのかということも、大きな課題であります。

いずれにしても、そういう問題につきまして、教官がファカルティ・ディベロップメントをきちんと考えると。そういうことが必要なんですけれども、2、3の機会に、多くの先生方がお集まりになっているところで、そういうお話をしましても、きょんとしておられまして、自分たちはきちんとやっているという自負がおりなので、なかなかこのファカルティ・ディベロップメントということの意味自体が伝わらないし、なかなか困ったことになってきますが、何というんでしょうか、たいへんだなという感じがしているわけです。

こういった中で、このセンターではいろいろと工夫をしていただいて、少しでもいい方向に全体がいくように努力をしていただいております。私どもは非常に感謝をしております。こういうシンポジウムの機会をいろいろと設けて、これをまた本にして出したりしていただいておりますけれども、今回につきましては、わざわざ遠くから稲垣先生、あるいは米谷先生、山地先生においでいただきまして、今日半日いろいろご議論をいただくというのは、非常に有り難いことであります。お礼を申し上げたいと存じます。

少し長々となりましたけれども、私のちょっとした感想でありまして、取り留めもなかったんですけれども、これで挨拶にかえさせていただきます。